

スウェーデンにおける就学前学校から小学校への移行

山 本 理 絵

幼児期から小学校への移行期については、日本においても重視されるようになってきている。とりわけ、障害がある子どもや多様な教育ニーズのある子どもについては、関係機関との連携に基づく移行支援が求められる。この移行を丁寧に行っているスウェーデンの状況について、就学前学校教師のウエンドラー由紀子氏から情報を得ることができたので、その内容含めて、スウェーデンの就学前学校の教育・保育と小学校への移行（ゼロ年生）について以下に紹介する。

1. スウェーデンにおける就学前学校から小学校への移行の制度と保育・教育の特徴

スウェーデンの小学校は「基礎学校」（1年生から9年生）の中に入っており、小学校入学は7歳になる年の8月末から9月の時期で、日本より半年ほど遅く、ゆっくり移行する制度となっている。小学校1年生の前に「就学前クラス」（通称「ゼロ年生」）が設置されており、基礎学校の校舎の中などで、年間525時間の無償教育（3歳から無償）が行われていたが、2018年秋学期（2018年1月に国会で決定）から、これが義務教育に組み込まれた。就学前クラスの教育時間は短いため、多くの子どもはその前後に基礎学校内にある学童保育を利用している¹⁾。

なお、ゼロ年生は就学前学校教師の資格でも指導はできるが、1年生からは小学校の教職免許がないと教えることはできない。ゼロ年生の担当教師は、毎年ゼロ年生専門に担当することが多い。

2010年に学校法が改正され、就学前学校が他

の学校形態から独立した地位を合法的に与えられるとともに、国連子どもの権利条約の基本理念が盛り込まれ、就学前学校でも、子どもの権利や最善の利益、民主主義の価値観が尊重されている。さらに2020年の1月から子どもの権利条約が法律化されその精神が徹底されることになった。

スウェーデンの就学前学校のナショナルカリキュラムは、1998年に公布され、その後、2010年、2016年、2018年に改定（2019年7月施行）が行われている²⁾。2010年のカリキュラムの改訂では、目標として、子どもの言葉と会話能力の発達、数学的能力の発達、自然科学と技術に関する目標が追加された（職員が仕事を確実に行うことができるよう方向性を示していて、子どもたちが達成すべき目標ではない）。また、教育活動のフォロー、事後評価、発展の取り組みによる質の向上、及び就学前学校長の責任について記した節が新設された。各就学前学校では、このカリキュラムに基づいて、それぞれの計画が立てられ、子どもの成長と学びについてドキュメンテーションが作成されることになった。

そして、2018年の改定（2019年から実施）では、就学前学校の任務に関する詳細な記述が増えるとともに、子どものケアと発達と学びを援助する就学前学校教師の役割を *undervisning*（ティーチング）という用語で位置づけ、その責任を負うことが明記された。しかし、それは、就学前学校が「教える」ことを重視するのではなく、「教育とケア」を統合的にとらえ、子どもの興味・関心、探究に基づいた遊びの中で安心感と自己肯定感を育むとともに、子ども一人ひとりの全面的な発達と学び

を促進するという基本方針が述べられている。また、「参加」という概念が加えられ、子どもが意見表明して、就学前学校の環境構成や計画作成、活動に参加する権利の保障が強調された。

2. 5, 6 歳児のプロジェクト活動「からだ」の実践事例

(1) 保育者による子どもたちの興味に関する観察

ウェンドラー氏は、スウェーデン・ストックホルム県ソーレンツーナコミュニティ（区）にある、ソフィエルンド基礎学校附属就学前学校³⁾で、2018 年秋から、准保育士と一緒に 5-6 歳児グループ Venus の子ども 15 人を担当していた。スウェーデンでは、レッジョ・エミリアのアプローチを取り入れ、以前から行われていた「テーマ活動」をプロジェクト活動として発展させている。2019 年春学期（1～6 月）に行った「からだ」をテーマとしたプロジェクト活動の概要は以下のようである。

1 月は保育者が観察する時期で、子どもたちは、お医者さんごっこでぬいぐるみの鼓動を聞いて、「静かにしないと聞こえない」「人間と同じように心臓がある？」などと言って遊んでおり、身体に興味がたくさんあることに気がついた。6 歳児は歯が抜け始めてきたので歯にも興味深々で、「乳歯は何本ある？」「どうして抜ける？」「何を食べたら歯は強くなる？」などと毎日話し合っていた。そこで、サムリングのときに出た子どもたちの疑問を書き出して、壁にドキュメンテーションとして貼った。それらの質問に答えるように、テーマを「からだ」に決め、2 月から活動を開始した。

(2) テーマ「からだ」のプロジェクト活動

「からだ」の活動をするにあたって、大きな紙に子どもが仰向けになり、輪郭を形どり人間の形を描き、子どもたちと相談して、男女どちらでも使われる名前 Kim と名付けた。日本の「あたま、かた、ひざボン」の歌のスウェーデン語版の歌をうたったり、それぞれの部位のスペルを書い

たカードを、床に置いた 4×5 マスの中に置いて、スタート位置から歌の順番に玩具 Blue-bot⁴⁾が進むように上下左右のボタンを押してプログラミングして遊んだ。その後、以下のような体の部分について、一週間に 1 回、主に朝の活動時間 9 時から 10 時半に活動を行い、4 か月間ほど続けられた。

- ・脳—脳と同じ重さの 1 キロの石を袋に入れて、1 人ずつ持ってもらって重さを体験したり、粘土で脳の形をつくったり、脳の標本や図鑑を見て、それに近い色を子どもたちがつくって描いたりした。
- ・顔—子ども 2 人組でお互いの顔を描いた。描いている人と、髪の色や目の色などについて会話をしていた。スウェーデンの場合は髪の毛の色や、目の色、肌の色など様々なので、外見で人を判断することはほとんどないが、違っていてもみんな平等であり、価値や権利などは同じということを理解してもらいたかった。顔を描いた後に、「Makey Makey」⁵⁾という、伝導体と伝導体でない物質を利用する玩具で遊んだ。水分があるものは電気を通すので、顔の中の伝導体は何か考えて実験してみた。眉毛、まつ毛、鼻、口、ほっぺ、おでこなどと書いたカードを作り、子どもは試したい部分のカードを自分で選んだ。「Makey Makey」をコンピュータ・ネット上のアプリとつないで、「Makey Makey」のコードの先端の金属部分を右手で持って、左手に持ったもう一本のコードの先端で自分の頬など水分のある部分を触ると電気が流れて音が鳴ってアプリのピアノの色がつく。最後に頭を試してみると、髪の毛は乾いていたので鳴らなかった。
- ・骨—一番長い腿の骨と同じ長さくらいの枝や、一番小さい耳の部分の骨と同じ大きさの米粒（黒い紙の上に置いて）の、大きさを見て長さを実感したりした。Kim に骨がなかったので、子どもたちが自ら標本や図鑑を見ながら分担・協力して描いた。指は普通 5 本あって、1 本の指に付きだいたい 3 本ずつ骨があることがわかり、自分の手形の上にストローを切って 3 本ずつ置いた。それを全部数えると 15 本になると

というようなことも理解した。

- ・耳—どうしてこういう形をしているのだろうかというように話をし、糸電話をして、どのようにして音が流れているか考えた。また、iPhoneのスピーカーに、トイレトペーパーの芯で耳のような形を作ることによって、音がもっと大きく聞こえるというのを体験した。
- ・鼻—みんなのマスコット人形・ドラゴンのベルタという友達が、6種類の臭いが入った試験管を持ってきてくれる設定で、それぞれの臭いをかいで、何か当てるというゲームをした。シナモンやカレー粉、酢を入れたり、臭いが無い砂糖を入れたりした。子どもたちは、何の臭いか考えて面白がってやっていた。そして、臭いの名称やシナモンや砂糖などのスペルも Blue-Bot を使って学んだ。「これはなんて書いてる？」と言っても覚えませんが、Blue-Bot で遊びながらやると不思議と覚えてくれた。
- ・感触—これも箱を作りその中にいろいろな物を入れて、触って何か当てるゲームをした。一人の子どもが触って考えているときは、他の子どもたちには入っている物が見えているがだれも答えを言わなかった。自分の順番を待ったり、友達がやっているときは黙っているというルールも学んでもらうことができた。
- ・血液—6歳児くらいの血液は、だいたい4リットルあるので、赤い水を4本の牛乳パックに入れてみた。赤い水は子どもたちは大好きで興奮して、牛乳パックに入れる手伝いをしてくれた。これだけあるのだと感覚的に理解し、絵にも描いてみた。

(3) 教育的ドキュメンテーション

それぞれの活動をするたびに、Kim の体の中に、脳、骨、肺、心臓などを描きこんでいった。また、子どもたちがお互いの顔を描いている場面の写真、描いた顔、「Makey Makey」で実験をしている写真、実験してみた感想などを部屋の壁面に貼ってドキュメンテーション化していった。活動したことをビジュアル化していくと、子どもたち

も何をやったかわかりやすいし、保育者や保護者たちもよくわかる。最後には、最初の空っぽだった Kim の体がいっぱいになり、子どもたちと体のことはこんなにやると実感でき、5月最終日にこのプロジェクトを終わりにした。最後に締めくくりとして、5月末に自然博物館に行った（バス代も、入場料も無料）。

3. ゼロ年生への移行

Venus クラスの子どもたちは2019年で6歳なので全員ゼロ年生に移行した。就学前学校からゼロ年生に移る前の流れについて、ソーレンツーナ就学前学校のケースを中心に、以下に記す。

(1) 5歳児全員の一般的な移行の流れ

①保育者が子どもと一緒に作る引継ぎシート

ゼロ年生への移行前の5月頃に、保育者が子どもと一緒に話をし、ソーレンツーナで作っている引継ぎ同意書のフォーマット（シートA）に書き込む。子どもの好きな活動、子どもが得意とすること、子どもが思う親が得意と思っていること、就学前学校教師からみた長所、子どもの心配事、子どもの入学についての感想などを記入する。「今、好きな活動は何？」—「レゴが好き」、「得意なことは何？」—「算数、5掛けの3ができるんだ」、「親が自分のことどう思ってる？」—「僕は縄跳びが上手ってパパによく言われるよ」という会話をする。また、「ゼロ年生に行くのに何が心配なことある？」—「自分のロッカーの場所がわからないから教えてほしいと思っている。先生に言えないけど言ってくれる？」—「わかった。書いておくね」、「ゼロ年生になることはどう思う？」—「やっぱり先生とお別れするのがちょっと寂しいな、友達と別れるのは寂しいな」などと、全て就学前学校教師が子どもに聴いて子どもの言葉で書く。

そして就学前学校教師は、このシートに子どものよいところを書いて、それに保護者がサインして、保護者がこれを学校に提出するというのが一

一般的な場合である。

就学前クラス側では、新学期の始まる8月～9月または6月頃に、学校で、ゼロ年生担当教師と子どもと保護者が個別に面談を行うが、その際に、このシートは保護者からゼロ年生教師に直接手渡される。

②ゼロ年生の活動の体験

ゼロ年生に移行する前に、子どもは保護者と一緒にゼロ年生の学校に行って、慣らし教育のような場面が2、3回ある。一緒に給食を食べてもらう日や、一緒にサムリングに参加してもらう日など。サムリングは就学前学校でもあるが、ゼロ年生でもある。ゼロ年生は、基礎学校の教室とは違ってまだ一人ひとりの机はない。サムリングをするカーペットの横に共同のテーブルがあることがほとんどである。このように慣らしして徐々に移行していくので、子どもたちはみんな学校を楽しみにし、8月からゼロ年生を始めていける。

(2) 特別な支援を必要とする子どもの移行の流れ

①保育者と保護者との面談及び引継ぎシート

障害や学習上や社会適応上困難なことがある子どもの場合、就学前学校教師は、そのような子どもの状況を保護者には「問題」とは言わずに、“就学前学校で行っているような指導・配慮をゼロ年生・基礎学校の教師たちに伝えと、スムーズに移行できるのではないか”という話をする。それでも伝えないでほしいという保護者もいるので、そういう場合は伝えない。

このようにして保育者と保護者が同意した子どもについては、もう一つ別の引継ぎ同意書（シートB）がある。就学前学校ではどのような場面で特別なサポートが必要とされ、どのような支援をしており、どのような方法が効果的かというようなことを、保育者が保護者と面談して書く。保護者に、子どもの状態や、必要な指導、子どもにとってベストなことは何かという話をしながら書く。

例えば、朝早く親が子どもを就学前学校に送ってきたときに、親との別れが悲しくて1時間くら

い泣いていたり、一日中、活動できなかったりする子どももいる。そういうときには例えば、その子の好きなことがあって、それをやりながら徐々に立ち直り、慣れていって普通の生活をするようになるので、こういうことをお勧めしますということを書いている。あるいは、膝に15分乗せていたら立ち直るので、そのようにしてください、というように本当に具体的なことを書く。これも、もちろん内容を親が見て同意のサインをして、ゼロ年生の教師に渡す。

障害児と診断されていなくても、人見知りの子や泣いたら止まらない子や行動を一緒にできない子、集団行動や学習が難しい子などに対して、どうしたらいいかをゼロ年生の教師は知りたいと思っている。そのときに、就学前学校の教師は、保護者の同意書をもらわなければ話せない。

シートBに同意してサインをもらった保護者には、さらに、ゼロ年生の教師に渡す必要がある特別の書類を確認してもらい、その同意をもらうためのシート（C）がある。そのシートには、子どもの国民番号、書類を学校が保管できる期限、書類の種類が書かれる。書類の種類は、診断書、特別な支援に関する調査、対策、医療情報、言語診断書、精神診断書、社会性診断書、その他の8つのリストからチェックするようになっている。就学前学校教師と話し合ってそこに保護者がサインし、保護者が必要な書類を保健所等からもらい、保護者がゼロ年生の教師に手渡す。

なお、スウェーデンでは、健診は1歳までは2か月おきくらいにあり、その後1歳半、3歳、4歳、5歳～5歳半と、こまめに発達の診査が行われている。5歳では、就学前学校でどのように子どもが生活しているか、就学前学校教師のみが記入できる書類があり、保護者が保健所からもらった用紙に記入し、言葉、理解力、社会性、身体能力などについて問題がある場合は記入して保健所に戻している。

②ゼロ年生教師と保護者との面談

ゼロ年生側も、シートBをもらうと、他の子

どもと同様に、入学前に、保護者を一人ひとり学校に呼んで子どもと一緒に事前面談を行う。そこで保護者は、家庭での様子や就学前学校の様子など、聞いてほしいことを教師に話す（15分から20分くらい）。同意書（シートB）をすでに渡しているのので、就学前学校教師から、ゼロ年生の教師へ詳しい話をすることもある。

③就学前教師とゼロ年生教師による懇談

保護者から同意書をもらった特別な支援が必要なお子さんについては、ゼロ年生移行前の6月頃に、ゼロ年生の教師から電話連絡があり、その教師が就学前学校に来て、就学前学校教師と一緒に移行について話をする。Venus クラスの場合、対象の子どもが3人いたので、特別支援教育者（スペシャルペダゴグ：基礎学校に1人ずつくらいいるが、小さい学校にはいない場合もある）も一緒に来てくれた。話す内容は、同意書をもらった特別の子どものことだけで、3人の子どもについて、3人の教師で1時間半くらい、こういうときはどうしたらのよいかや、使っているマテリアルなどについて話をした。

クラス分けについても、ゼロ年生は2クラスがあって、Venus の子どもたちの誰と誰を分けたほうがいいのか、就学前学校教師のほうから話をし、3人の教師で話し合って決め、その通りにしてくれた。クラスについては親からの希望も考慮はするが、その通りにならない場合もある。

スウェーデンには、障害が重い子どもや聴覚障害者等のための特別支援学校はあるが、通常の学校の中に特別支援学級はないので、通常の学級で加配を付けることも含めて、支援方法が具体的に引き継がれる。特別支援学校に行くか通常の学校に行くかの選択は3月頃までにする必要があるのので、特別支援教育者も話し合いに入ることもあり、子どもの状況や学校の状況などを伝えて、保護者に決めてもらうようにしている。

3. コメント

(1) プロジェクト活動について

この実践の子どもたちの年齢は、日本でいうと4歳児クラスの終わりから5歳児クラスの春頃までの時期になる。テーマ活動「からだ」は、かなり知的な内容を含んでいるが、子どもたちの興味・関心・疑問に基づいたものである。4、5か月間にわたって続けられ、脳だけで1か月間を費やすというように、無理なくゆつくりと進んでいる。「からだ」の活動には、教師も意識して、美術、生物的・数的・図形的認識、プログラミング・IT、道徳的な内容を含みこませている。とくに大きな行事もなく、自由遊びの時間をたっぷりとしているスウェーデンでは、ゆったりと子どもの興味にそった活動を継続することができる。子どもにとって魅力的な活動であることと、クラスの人数が少ないこと、教育的ドキュメンテーションを行っていることから、子どもたちはプロジェクト活動に意欲的に参加することができる。なお、あくまでこの実践は一事例であり、一般的な例として紹介するものではない。

(2) 小学校への移行について

スウェーデンでは、小学校への移行がゆるやかであり、その際の引継ぎシステムが確立されている。日本でも、特別な支援を必要とする子どもについては、保護者が保育者と一緒に引継ぎシート（個人ファイルやリレーシートと呼ばれることもある）を作成し、保護者が小学校に持っていくと、学校から教員が保育園等に子どもの様子を見に来て保育者に詳しい話を聴くようなシステムになっている自治体もあるが、まだ一般化しているとはいえない。シートを作成するのも、教育委員会や学校に就学相談をしに行くのも、保護者に任されていることが多く、保護者が自ら積極的に動かなければならない状況が多い。しかし、スウェーデンでは、就学前学校の教師が身近な相談相手となり、学校への引継ぎを仲介している。

そして、個人情報保護を厳守しているスウェー

デンでは、それぞれの情報の引継ぎについて、保護者の同意書が必要となっていることも特徴的である。同意書をもらうのに保育者は神経を使うようだが、3歳から持ち上がりだった担任との信頼関係ができていることも多く、同意書を書くことで、必要な情報を引き継いで理解してもらえ、学校で子どもの状況に応じた配慮をしてもらえるので、保護者の負担は少ないといえる。

学校に情報を伝えないでほしいという保護者もいて、その家庭の子どもについては、小学校も事前に情報が得られず子どもが入学してから戸惑うという状況は、スウェーデンでも日本と同じように課題となっているようであるが、そのようなケースは日本より少ないと考えられる。

また、日本の場合、通常の学校の中に特別支援学級があり、就学先を通常学級にするのか特別支援学級にするのか悩まされるが、スウェーデンの場合、特別支援学校に相当する学校はあるが、2010年の学校法改正で特別支援学級はなくなったので、保護者の迷いは少ないといえる。

特別な支援が必要ではない子どもたち全てについても、子どもたちの意見を聴いて、肯定的な面からの引き継ぎ書が作られ、子どもの心配事も記載されて、ゼロ年生の担任教師に渡され保護者とともに面談があることは、子どもたちにとっても安心につながると思われる。日本では学校へ送られる保育要録も担任に読まれないこともあることが問題となっている。また学校体験は日本でも行われているが、スウェーデンでは保護者と一緒に参加するので安心感があり、保育施設から遠くても保護者が連れて行け、数回に分けて丁寧に行われているといえる。このような方法を日本でも取り入れてみる必要があるだろう。

参考文献

- 1) 学童保育 (fritidshemmet: 英訳 school-age educare) の目的や内容については、基礎学校カリキュラム (Grundskolan) に明記されており、2018年度の改定から、カリキュラムの名称も「基礎学校、就学前クラス、学童保育の教育カリキュラム (Läroplan för grundskolan, förskoleklassen och fritidshemmet)」と表記されている。
- 2) Skolverket, 1998; Läroplan för förskolan (Lpfö 98).
 ・ Skolverket, 2010; Läroplan för förskolan (Lpfö 98) Reviderad 2010.
 ・ Skolverket, 2016; Läroplan för förskolan (Lpfö 98) Reviderad 2016.
 ・ Skolverket, 2018; Läroplan för förskolan (Lpfö 18).
 ・ 白石淑江・山本理絵「スウェーデンの就学前学校カリキュラム」(日本保育学会・国際交流委員会「世界の保育関連指針・要領の概説」) <http://jsrec.or.jp/wp-content/uploads/2019/06/4.-Sverige.pdf> 参照。
- 3) ソフィエルンド基礎学校附属就学前学校の概要については、山本理絵「小学校への移行期の生活と保育・教育方法に関する一考察—スウェーデンにおける教育ドキュメンテーション・プロジェクト活動の調査から—」(『人間発達学研究』第8号 2017年)を参照。
- 4) Blue-botについては、ウェンドラー由紀子・山本理絵「スウェーデンの就学前学校における教育・保育—ITと教育ドキュメンテーションの融合によるプロジェクト活動—」(『生涯発達研究 10』2018年)を参照。
- 5) Makey Makeyについては、ウェンドラー由紀子・山本理絵「スウェーデンの保育 2018—近年の保育・教育の動向と実践—」(『生涯発達研究 11』2019年)を参照。

付記: 本研究は、2019年度日本学術振興会・科学研究費補助金(基盤研究(C))研究「小学校への移行期のインクルーシブ保育・教育におけるプロジェクト活動の展開方法」(山本理絵研究代表)の一環であり、ウェンドラー由紀子氏には、2019年度生涯発達研究所の特別公開授業(7月17日)としても、話題提供していただいた。